平成 30 年度事業計画		指標	平成 30 年度業績	自己評価
	フェスタ（オープン・キャンパス）を実施するとともに、地域の中・高校生や地域住民のイベント参画を促進します。		催し、4,500 名の皆様に 31 の科学プログラムを楽しんでいただきました。350 名の本学教員・研究員・学生・事務職員等がボランティアとして参加し、また恩納村の小中学生 14 名が放送ボランティアとして参加しました。また、今回は北海道大学リーディング・プログラムの学生が科学デモを行いました。	A+
	4127　沖縄県内の児童・生徒に、世界最先端の研究環境を体感し、科学技術分野での進学又は就職への関心を高めてもらうことを目的として、県内学校からの本学キャンパス訪問を積極的に受け入れます。特に、沖縄県教育委員会や県内各高等学校と緊密に連携し、県内の全ての高等学校を対象とする訪問プログラムを引き続き推進します。また小・中学校児童生徒による見学も促進します。		4127　沖縄県教育委員会および各地区教育事務所を通じ周知の結果、高校 25 校、1,480 名、中学校 11 校、435 名、小学校 24 校、1,780 名を受入れ、本学の教育、研究について紹介しました。（合計　3,554 名）	4127 A+
	4128　県や観光組織との連携により高度な科学技術教育プログラムを行う本土のスーパー・サイエンス・ハイスクールの本学への訪問を引き続き実施・強化します。		4128　東京で開催された修学旅行フェアに参加する等情報発信し SSH 校 5 校 313 名の生徒が本学を訪問しました。（その他高校含め県外全体 13 校 683 名）	4128 A
	4129　引き続き全ての学年の児童・学生に対して、本学の教員や外部の著名な科学者による講演会を開催します。		4129　サイエンス・フェスタに国立天文台および東京工業大学より講師を招聘し、講演を実施しました。	4129 A
	4130　恩納村と協力して、第 9 回恩納村・OIST こども科学教室を開催します。		4130　8 月 20 日から 24 日までの 5 日間、第 9 回恩納村・OIST こども科学教室を開催し、7 クラス 142 名の児童が参加しました。31 名の本学ティーチング・スタ	4130 A+

平成 30 年度事業計画		指標	平成 30 年度業績	自己評価
			ッフに加え、本学職員 55 名、役場職員 12 名、恩納村学校教員 35 名、10 名の大学生インターンがボランティアとして教室を手伝いました。	
	4131　地元の人々に本学を訪問してもらうために、本学の講堂や他の施設を活用し、コンサート、展示会等文化的なイベントを開催します。		4131　沖縄県立芸術大学との連携等美術展（4 件）、音楽コンサート（2 件）、琉球伝統芸能（1 件）、を開催し多くの地域住民が参加しました。	4131 A
	4132　地元教育委員会による英語教育に関する会議及び地元の学校で実施される英語講座への本学関係者の参加促進等により、子供達の英語力及び異文化理解を深めるために、地元の学校に協力をします。		4132 -恩納中学校統合推進協議会および専門部会に出席しました。建設中の恩納中学校で、恩納村教育委員会のメンバーと科学教育について、とりわけ女子学生への科学教育促進に関する取り組みについて議論しています。 -恩納村教育委員会主催の「英語ストーリー・スピーチコンテスト」をキャンパス内で開催し、英語教師と広報ディビジョン・スタッフが審査員を務めました。	4132 B/A
4 **沖縄の自立的発展への貢献に関する事項** **取組**	（その他の取組） 4133　引き続き、地元密着型ジョブ・フェアの開催、沖縄高等専門学校への就職説明会等に参加し優秀な県内出身者の雇用に努めます。 4134　「沖縄の産業まつり」等に参加したように、引き続き、県内の主な文化的、産業的、学術的イベントに参加します。また、米国総領事館及び沖縄県と連携し、沖縄で主要な科学教育競技の一つとなっている、高校生を対象とした起業のための研究能力を競う科学イベント「SCORE」を引き続き実施します。	・沖縄出身の職員数（研究者、事務系職員等） ・本学で開催された外部主催の国際会議及びワークショップの数、及びその参加者数	（その他の取組） 4133　地元密着型ジョブ・フェアを開催し、県内出身者を採用しました。 4134　沖縄県内の那覇および本当各地域で開催される「沖縄青少年科学作品展」「名護サイエンス・フェスタ」「沖縄の産業まつり」等に参加し、OIST について紹介するとともに科学デモを行いました。また、第 7 回 SCORE を開催し、県内高校 8 校から 12 チームが参加し研究および社会での応用についての提案を競いました。	4133 A 4134 A+

平成 30 年度事業計画	指標	平成 30 年度業績	自己評価
4135　OIST ファンクラブの活動を本格スタートし、会員への OIST 情報提供、イベントに参画する機会を提供します。		4135　人的制約により他プログラムに比べ優先順位の高くない同クラブの設立は見送ることとした。	4135 D
4136　引き続き琉球大学その他の県内大学インターン生を受入れ、広報ディビジョン内の業務を経験させるとともに本学学生等との交流も促進します。		4136　琉球大学から地域連携業務に 3 名、通訳業務に 2 名、メディア業務に 3 名、計 8 名の学生を受入れ、それぞれ業務を体験し、本学の各部門職員、学生とも意見交換等交流しました。学生達は「こども科学教室」の業務にも携わりました。	4136 A+
4137　離島地域での出前授業を若手研究員学生の協力を得て継続実施します。		4137　離島（伊平屋島、宮古島、石垣島）にて若手研究員、学生による講演、科学デモンストレーション、トークを実施しました。	4137 A
4138　沖縄県及び沖縄観光コンベンションビューローとの連携に加え、新たに認定された MICE 誘致アンバサダーの資格による日本政府観光局からの支援を有効に利用しつつ、より多くの優れた外部主催の国際会議・ワークショップを本学で開催し、本学の研究者や学生が参加者との連携や学術的地位が向上するよう図ります。		4138　カンファレンス・センターやメイン・キャンパス及びシーサイド・ハウスの会議施設を積極的に外部の団体などに貸し出し、21 件の外部機関主催・共催学術会議、および 38 件のその他外部団体イベントでのべ 6,473 人が施設を利用しました。 特筆すべきイベントとしては、FY2017 に日本で初めての開催となった「ハーバード大学医学部臨床研究教育プログラム」が 2 年目のプログラムも本学で開催したことや、日本学術振興会が主催する第 11 回 HOPE ミーティングに会場を提供し、のワークショップや、「第 14 回全国大学コンソーシアム研究交流フォーラム」、「サンゴ礁大規模白化緊急対策会議」、日本学術振興会科学研究費補助金による複数の新学術領域研究会開催の会場とな	4138 A+

<table>
<tr><th>平成 30 年度事業計画</th><th>指標</th><th>平成 30 年度業績</th><th>自己評価</th></tr>
<tr><td></td><td></td><td></td><td>ったことなどがあげられます。

<table>
<tr><th></th><th>事務職他</th><th>技術員</th><th>研究員</th><th>合計</th><th>割合</th></tr>
<tr><td>沖縄県出身者</td><td>120</td><td>15</td><td>60</td><td>195</td><td>23.24%</td></tr>
<tr><td>県外</td><td>154</td><td>56</td><td>434</td><td>644</td><td>76.76%</td></tr>
<tr><td>合計</td><td>274</td><td>71</td><td>494</td><td>839</td><td>100.0%</td></tr>
</table></td><td></td></tr>
<tr><td colspan="4">第 5 章 キャンパス整備・大学コミュニティの形成、安全確保及び環境への配慮に関する事項</td></tr>
<tr><td>5.1
キャンパス整備
目標</td><td>引き続き、本学は、計画通り、キャンパスの整備を進めます。</td><td></td><td></td><td>A</td></tr>
<tr><td>5.1
キャンパス整備
取組:</td><td>5101 OIST の段階的拡張に基づき、平成 26 年度に作成されたマスタープランの検討、及び更新を引き続き行います。

5102 第 5 研究棟の基本設計を開始するとともに、今後の第 5 研究棟に係る実施設計等について検討を行います。</td><td></td><td>5101 キャンパスの将来の展開を考えるタスクフォース（施設部副学長が議長）におけるスタディーと時を同じくして、修正マスタープラン策定の為のスタディーを開始しました。初期調査として本学の将来人口、研究及びアドミの為に要求されるスペース等が今年度検討され、次年度も引き続き行なわれます。コンサルタントによる修正マスタープランの設計に関する調査も開始され、次年度も引き続き行われます。

5102 Lab 5 の基本設計を行うコンサルタントを選定し、25 名の PI の為の研究スペースと動物実験施設を含む研究棟の基本設計を完了しました。</td><td>5101
A

5102
A</td></tr>
</table>

平成 30 年度事業計画		指標	平成 30 年度業績	自己評価
	5103　第 4 研究棟及び第 4 研究棟につながる道路や橋を含めた設備やインフラ整備を計画的に行い、完成します。		5103　今年度夏には大型台風が上陸しましたが、Lab 4 関連の工事（建屋建設工事、埋設配管工事、土木工事を含む）は全て計画通りに施工されました。	5103 A
	5104　引き続き、将来の R&D ゾーン及びオンキャンパスハウジングの建設について、インフラ及び土木工事のコスト分析及び実現性を検討します。		5104　新規住宅部のインフラ及び造成工事に関するコスト分析及び実現性の検討が予定通りに完了し、工事は次年度に開始されます。R&D ゾーンのインフラに関するコスト分析及び実現性の検討も完了しており、設計及び工事については概算要求が承認され次第開始する計画です。	5104 A
	5105　第 1 期として、リサーチインキュベータ施設と必要なインフラを早期に整備し、使用を開始します。また、30 年度整備のインキュベーター施設の運用状況を踏まえ今後の整備等を検討します。		5105　最初のインキュベーター施設及び必要なインフラは計画通りに完成しました。施設の運用は TDIC を通して開始されています。	5105 A
	5106　既存のキャンパスビルディング及び施設の運用及び維持を行います。		5106　2018 年度の施設設備の維持管理業務は、新設・増設された CDC、インキュベーター施設、駐車場、構内道路、既存施設内の改修された研究室、工作室なども対象とされました。既存の施設・設備、新設・増設された施設・設備は、施設管理部と施設管理部が業務委託している施設管理専門業者とが協力して、大きな事故やトラブルも無く適切に維持管理されています。	5106 A
	5107　透明性を確保するため、公共工事の入札及び契約の適正化の促進に関する法律（平成 12 年法律第 127 号）に基づき、入札スケジュールや結果等の入札前後の情報開示を引き続き推進します。		5107　入札における透明性及び情報開示は本学全ての部署において重要視されています。数多くの入札の中で、大型案件としては、Lab 4 の建設及び土木工事、Lab 5 の基本設計、PFI 住宅事業が挙げられますが、これら	5107 A

平成 30 年度事業計画		指標	平成 30 年度業績	自己評価
			は全て公共工事の入札及び契約の適正化の促進に関する法律（平成 12 年法律第 127 号）に基づいて行われました。	
5.2 **大学コミュニティの形成、子弟の教育・保育環境の向上** 目標	職員及び学生やその家族を含む大学コミュニティの発展は、大学運営を成功させる上でも重要であることから、引き続きその推進に努めます。人員及びサービスの拡大や、リソース・センターやチャイルド・ディベロップメント・センター（CDC）を通じて、教職員の教育及び保育環境の向上を図ります。また、今後とも増加が見込まれる職員、学生及びその家族のため、キャンパス内外での新たなハウジング整備について検討を進めます。			**A**
5.2 **大学コミュニティの形成、子弟の教育・保育環境の向上** 取組	（大学コミュニティの形成） 5201　OIST 関係者に対するサービス改善のためリソース・センターの情報収集方法を改善します。保健センターの新規職員が業務を開始し、トレーニングを受けます。その後、OIST クリニックの再開について検討を行います。保健センター及びがんじゅうサービスと連携し、OIST 職員向けのサービス向上に努めます。CDC の人材配置モデルを構築し、良質な保育を確保する CDC の予算と過去の予算執行を分析し、経費を抑制し、小学生を対象とした STEM 教育を提供するための学童プランを構築します。引き続き、本学のコミュニティを形成する教職員・学生ならびにその家族の他、短期滞在の外部職員に対しても学内外の施設の情報提供とサポート体制づくりを継続して行います。上記の目標を達成するため、保育サービス、ファミリーサポート、フードサービス、健康・医療サポートや生活におけるニーズのサポ		（大学コミュニティの形成） 5201 （a）以前は、リソース・センターのユーザーに関する情報は共有のメール・アカウントに収集されていました。 ユーザーの種類（教員、学生、事務職員、家族など）とサービスの利用状況（運転免許証の変換、携帯電話の SIM カードの取得など）を追跡することで改善されました。 これらの情報を収集するために新規スタッフを配置し訓練しました。 （b）クリニックは、大学コミュニティ支援オフィス（UCS）と保健センターのマネジャーおよび新しい産業医との間で何度かミーティングを開催しました。 プロボストと協議し、限られた時間内でクリニックを再開するという結論に達し、今年度末に再開しました。 次年度の初めに、クリニックは UCS の監督下に置かれます。保健センターのマネジャーと産業医はタスクフォース	5201 A

平成 30 年度事業計画		指標	平成 30 年度業績	自己評価
	ートに関連した人事サービス機能の強化を行います。		5 に参加し、現在および将来の本学の健康上のニーズが特定されました。 がんじゅうのスタッフは他の UCS 部門と定期的にミーティングを行い、本学コミュニティの心の満足を提供するための最善の策について話し合っています。 がんじゅうのスタッフはタスクフォース 5 に参加し、現在のサービスを維持し拡張する計画を立てました。 (c) CDC が開園した当初は先生 6 人、アドミ職員 1 人、園長 1 人で、園長が管理できる丁度良い人数でした。2017 年には園長 1 人で 30 人以上のスタッフを管理しなければならず、平坦な組織構造だったため管理者が 1 人しかおらず、対処できる仕事量ではありませんでした。CDC は保育園業務を補助する副園長を 1 人、新たに学童を管理するプログラム・ディレクターの 2 つのポジションをリクエストし、獲得することができました。CDC は、子供の数の増加に対応するため、教師の新規採用において UCS と協力してきました。 また、小中学校プログラムの教師採用でも UCS と協力してきました。 両教師は、次年度初めより OIST で働き始める予定です。これにより、本学職員および学生の子供たちに、放課後および休日プログラムを提供するための「小中学校プログラム」の機能が向上します。 (d) CDC が大学コミュニティ支援オフィスに移行したことにより、CDC の予算検討および支出履歴の評価について、シニア・マネジャーおよびビジネス・バックグラウンドを持つスペシャリストによる専門的なサポートを受けられることになりました。 UCS のビジネス・アナリストは、今年度の途中に着任し、CDC の財務分析	

平成 30 年度事業計画		指標	平成 30 年度業績	自己評価
			が現在進行中です。 財務ディビジョンを通じて、必要なすべての情報および文書へのアクセスが許可されるまでにはしばらく時間がかかりました。 (e) より安定した放課後および休日プログラムを提供するために、小中学校プログラム・ディレクターおよび経験豊富な専任の小中学校プログラム教師を採用しました。 (f) これらの機能は、2018 年 6 月/ 7 月に HR から UCS に移管されました。UCS は、サービス提供を維持し、本学全体に拡大しました。	
	5202 OIST が拡大するにつれ、公認クラブの数も増えているため、大学の基本方針やルールに違反しないよう適切に管理することが必要です。管理業務はリソース・センターが行います。		5202 クラブ活動の監視は、新たに雇用されたレクリエーション・サービス・ディレクターに移管されました。本学の統括弁護士と協議しながら、クラブ活動のための規則や手続きの策定、クラブによる学内スペースの使用など、クラブに対するより厳格な管理を行っています。クラブ活動を行うには登録が必要であり、申請されたクラブについて審査するための承認プロセスも整備し、大学の規則や規制に違反しないように確認しています。すべての関連資料は、レクリエーション・サービスの Web サイトに掲載しています。	5202 A
	5203 レジストレーション・デスクは引き続き客員研究員、招聘ゲストの窓口として対象者をデータベースに登録をし、受入支援を行います。この機能は現在リソース・センターがウェブサイトの強化等により担っています。		5203 レジストレーション・デスクの機能は、引き続きリソース・センターで担っており、円滑な客員研究員の受入支援を行っています。 また、リソース・センターは、リサーチ・ユニット・アドミニストレーター（RUA）からの要求に応じて、招聘ゲスト用 ID カードの対応を行っています。	5203 A

平成 30 年度事業計画		指標	平成 30 年度業績	自己評価
	5204　OIST の規模拡大に伴い必要となるハウジングとして、既設 PPP 住宅エリアへの増設のために造成・基幹整備の設計・工事を行います。同時に PPP 整備事業として住宅整備を開始します。また、新規の PFI 手法による住宅整備事業を開始します。同時に、PFI 住宅整備敷地の造成･インフラ整備の設計を開始します。また、オフ・キャンパス・ハウジングとして、恩納村米軍通信跡地開発事業者と協議を引き続き行います。		5204　PPP 住宅第 2 フェーズの契約が今年度締結され、設計業務が開始されました。造成関連の設計は完了し、造成工事が開始されました。 PFI 住宅に関しては、公示、事業者選定、契約締結が今年度に行われました。造成の設計も完了し次年度には造成工事が開始されます。 恩納村の通信基地跡地の開発計画は現在恩納村主導で進められており、本学も計画コミッティーの一員として参加しています。	5204 A
5.2 **大学コミュニティの形成、子弟の教育・保育環境の向上** 取組	（子弟の教育・保育環境） 5205　教職員及び学生の子弟の教育環境の向上を図るため、引き続き沖縄県や恩納村等の関係する地方公共団体と連携・協力し、英語による教育を受ける機会の拡大に努めます。		（子弟の教育・保育環境） 5205　恩納小学校に通っている本学職員の子供たちを支援するために、英語を母国語とする資格を持ったフルタイムの教師を採用し、子供たちに語学のカリキュラムを提供しています。 教師は、恩納小学校に通う子供の両親と定期的なミーティングを開催し、進捗について話し合っています。 また、恩納小学校校長とも定期的なミーティングを開催し、良好な関係を維持しています。	5205 A
	5206　CDC 施設や放課後クラスを活用し、引き続き質の高い、完全なバイリンガルの保育、学童保育及びホリデープログラムを適切な受益者負担のもと提供します。CDC 運営委員会は、引き続き四半期に一度会議を開くとともに、CDC 財務委員会会議を別途行うことにより、園の予算について厳重な注意が常に払われるよう徹底します。これらプログラムに参加する子弟の数は着実に増加しています。CDC の規模を拡充し、また、放		5206　CDC の 2 期工事が完了したので、CDC と小中学生プログラム（放課後および休日プログラム）は現在同じ建物内にあります。 CDC 理事会は、監督体制について議論するために昨年 2 回会合を行いました。 プログラムの申し込みと、すべてのプログラムに対する適切な料金の評価を継続します。 UCS がビジネス・アナリストを採用したことにより、CDC 予算の日常的な監督業務の多くは、UCS オフィスに移管されました。	5206 A

平成 30 年度事業計画		指標	平成 30 年度業績	自己評価
	課後クラスの運営等により対応していきます。 5207　恩納小学校での英語教育プログラムなど教職員・学生の子弟にとって有効な教育の機会を提供していきます。OIST 教職員・学生の子弟のため、国際的な教育環境の在り方について検討を行います。 5208　平成 30 年度には、職員とその家族に対して提供される英語及び日本語クラスの数を維持します。語学訓練への需要は非常に高く、英語と日本語におけるコミュニケーション能力は本学の成功の土台です。（再掲。2.4 参照）		5207　恩納小学校に通う本学職員の子供たちを支援するために、フルタイムの教師を採用しました。 教師は、恩納小学校に通う子供の両親と定期的なミーティングを開催しています。本学職員家族の教育ニーズを特定するための取り組みの一環として、今年度末にアンケート調査を実施しました。この調査の結果は現在分析中です。 5208　本学では前年度に引き続き同等の語学コース数を運営し、 42 の日本語クラスと 30 の英語クラスを開講しました。日本語クラスを受講した学生は 549 人、英語クラスを受講した学生は 397 人でした。さらに、英語クラスでは大学院、CPR、および教員担当学監オフィスと連携し、本学職員のためのセミナーやトレーニングを実施しました。また、英語クラブやドロップイン・サポート（受講生が講師のオフィスに直接出向いて疑問を解決すること）を毎週本学職員及びその家族に提供しました。日本語クラスではサバイバル日本語セミナーを行い、「落語」や「豆まき」などの文化イベントの提供に加えて、学長への会話コースを実施しました。	5207 A 5208 A
5.2 **大学コミュニティの形成、子弟の教育・保育環境の向**	（学生支援） 5209　学生に対し、良好な社会的・心理的な環境を提供するため、福利厚生を含む様々な支援活動を推進します。		（学生支援） 5209　学生支援については、県内の他大学に在籍する学生から、ピア・メンター・プログラムを通し日常生活に関する支援が継続して提供されました。 全般的な生活支援については、社会文化見学や交流会を	5209 A

平成 30 年度事業計画		指標	平成 30 年度業績	自己評価
上 取組	5210　引き続き、学生や OIST メンバーためのスポーツ、レクリエーション、社会活動の場を改善するよう努めます。		企画・開催し、県内の他大学の学生との交流を図りました。また、学生主体の活動の管理を行いました。 5210　今年度シーサイド・ハウスにおいては、交流の場としてのホールが完成しました。運動場は新規住宅の設計に含まれています。スポーツ及びレクリエーション施設は本学の将来計画の重要な要素としてマスタープランのスタディーに含まれています。	5210 A
5.3 **安全の確保及び環境への配慮** **目標 (1)**	キャンパス全体の事業継続計画を策定し、災害から教職員、学生、訪問者等を守るため、必要な防災対策を実施します。			**A**
5.3 **安全の確保及び環境への配慮** **取組 (1)**	5301　新たに採用した緊急対応コーディネーターを中心に、キャンパス全体の事業継続計画を策定し、必要なリスク対策を講じます。 5302　職員や学生に対する安全に関する必要な研修を実施します。 5303　恩納村とも協力しながら、災害に強いキャンパス作りを進め、災害の際にはキャンパス施設を近隣住民の避難場所として提供します。		5301　地震・津波、パンデミック、火災、巨大台風など重要な 7 つの事業継続計画を作成しました。 5302　火災・地震・津波について、教職員・学生に教育訓練を実施しました。 5303　緊急対応コーディネーター及び他のセクション、ディビジョンと協力しながら、災害時用備蓄品の準備を含む災害時の対策を構築中です。また、災害時においての復旧計画及び学園業務継続計画についても、更に詳細な対応策を検討中です。災害時の谷茶区住民、恩納村役場との連携は、地域連携セクションを中心に協力しながら計画を進めています。	5301 A+ 5302 A 5303 A
5.3	環境に配慮しながら事業を実施します。			

平成 30 年度事業計画		指標	平成 30 年度業績	自己評価
安全の確保及び環境への配慮 目標 (2)				A
5.3 安全の確保及び環境への配慮 取組 (2)	5304　引き続きリサイクル製品の使用を推進します。 5305　引き続き、温室効果ガス排出量とエネルギー消費を把握し、その抑制に努めます。 5306　水の再利用システムの適切な運用管理により、周辺水域への環境負荷の低減に努めます。また併せて地下水への影響が無いようにします。 5307　施設整備に伴う各種建設工事においては、濁水プラント施設を設置するなど、赤土流出対策を十分に行います。		5304　リサイクル可能な製品の使用を促進するために、他の部門およびユニットとの継続的な協力を行いました。 5305　施設管理部を中心に省エネルギー推進委員会を組織し、勤務時間外や休日の空調や照明の制限などを含めた全学的な取り組みを推進しています。また、Lab 4 やその他将来新築する施設用の熱源導入に ESP（エネルギー・サービス・プロバイダー）のスキームを活用し、プロバイダーの専門的知見を元に施設に適合した設備の導入を進めています。この熱源設備には重油に代わる天然ガスを利用したジェネレーション・システムを備えており、温室効果ガス排出量の大幅な削減及びエネルギー・コスト削減が期待できます。 5306/5307　本年度に発生した大雨や台風にも関わらず、建設現場から流出する赤水は濁水プラントを通すことや、また、建設現場への事前の定期的な調査によって適切に海へ放流されました。キャンパスやシーサイド・ハウスの台風被害は一部を除き復旧がなされました。本学の排水は高品質な処理施設を通して適切に処理され再利用されています。その処理施設は、定期的に点検・検査を行うことで品質を維持しています。	5304 A 5305 A 5306 A 5307 A

平成 30 年度事業計画		指標	平成 30 年度業績	自己評価
	5308　生態系の維持や固有生物種の保護に資するようキャンパス施設・敷地の管理を行います。		5308　本学は、要求水準の高い環境アセスメントに基づいたキャンパス開発を行う為に、キャンパスの自然環境の定期的な調査をコンサルティング業者へ業務委託しています。この業者は調査だけではなく、新規開発エリアが環境へ与える影響を最小限に抑えるための方策の提案なども行います。それにより、新しく作られた建物や道路は環境への影響を最小限に抑えるように計画されました。その結果、キャンパス内の在来生物は、健全な自然環境の中で変わらず生息していることが確認されています。	5308 A

平成30年度　業務実績報告　添付資料リスト

No.	File No.	資料名
1	1. 1-1	学生に関する情報
2	1. 2-1	平成30年度　OIST論文・発表数
3	1. 2-2	平成30年度　研究に関する受賞実績
4	1. 2-3	平成30年度　アウトリーチ活動実績
5	1. 2-4	平成30年度　OIST 研究施設の外部利用者
6	1. 4-1	学術交流協定一覧
7	1. 4-2	平成30年度　OIST主催によるワークショップ･ミニシンポジウム
8	2. 4-1	平成30年度　職位毎・国籍別職員数
9	2. 4-2	平成30年度　職員の給与水準
10	2. 4-3	平成30年度　研修の受講職員数
11	3. 1	外部資金・寄附金獲得状況
12	4. 1	特許状況
13	4. 2	平成30年度　受託研究等（産学連携）及びイベント

List of Attachment Documents to the FY2018 Performance Report

No.	File No.	Document Name
1	1. 1-1	Students Information
2	1. 2-1	FY2018 OIST Publications and Presentations
3	1. 2-2	FY2018 Research Honors
4	1. 2-3	FY2018 Outreach by Faculty and Researchers
5	1. 2-4	FY2018 The number of use of our research facilities by external organizations
6	1. 4-1	Academic Exchange Agreements List
7	1. 4-2	FY2018 List of OIST Funded Workshops/Mini-Symposia
8	2. 4-1	FY2018 Number of Employees
9	2. 4-2	FY2018 Salary Level of Employee
10	2. 4-3	FY2018 Number of Employees Taking Training Programs
11	3. 1	FY2018 External Grants and Donations Table
12	4. 1	Patent Status
13	4. 2	FY2018 Industry-related Collaboration and Innovation Seminars and Events

添付資料 1. 1-1　学生に関する情報

	No. of Applicants	No. of candidates attended admissions workshop	No. of offers made to applicants	No. of Students Admitted	No. of Males	No. of Females	Distribution of ages	Nationality	Major/Scientific Field	BS	MS	University
Class of 2018	502	114	60	34	20	14	22 (2) 23 (8) 24 (8) 25 (4) 26 (3) 27 (6) 28 (2) 29 (1) Average (24.9)	Argentina (1) Brazil (1) China (6) Colombia (1) Croatia (1) Egypt (1) India (7) Indonesia (1) Italy (1) Japan (1) Kazakhstan (2) Philippines (1) Russian Federation (3) Spain (1) Taiwan (2) United Kingdom (3) Viet Nam (1)	Biochemistry (1) Bioinformatics (1) Chemistry (4) Education and Rehabilitation Sciences (1) Environmental, Ecological, Marine (3) Mathematical and Computational Sciences (3) Molecular, Cell Developmental Biology (7) Neuroscience (5) Physics, Material Sciences (9)	9	25	Bandung Institute of Technology Beijing Normal University Cambridge University Doshisha University Edmond and Lily Safra International Institute of Neurosciences Ain Shams University Imperial College London Indian Institute of Science Education and Research (3) National Center for Biological Sciences, Tata Inst (2) National Institute of Technology Calicut National Taiwan Normal University National Technological University National Tsing Hua University Nazarbayev University (2) Novosibirsk State University Shanghai University Southern University of Science and Technology (2) Sun Yat-sen University Università di Bologna Universiteit van Amsterdam - Vrije Universiteit University of Barcelona University of Bristol University of Cape Town University of Edinburgh University of Science, Vietnam National University University of the Basque Country University of the Philippines Diliman University of Tsukuba University of Zagreb

平成30年度　研究成果（ユニット別）
FY2018 Scientific Productivity Summarized by Unit

	Books	Book Chapters & Journal Articles	Presentations	Dissertations, Online Databases, etc.	Unit Total
Administration	0	3	0	0	**3**
Arbuthnott	0	5	4	0	**9**
Bandi	0	4	6	0	**10**
Bourguignon	0	7	14	0	**21**
Busch	0	12	46	0	**58**
Chakraborty	0	3	23	0	**26**
Dani	0	7	21	1	**29**
De Schutter	0	5	6	0	**11**
Doya	0	5	42	1	**48**
Economo	0	23	25	0	**48**
Faculty Affairs	0	2	0	0	**2**
Feng (New)	0	1	7	0	**8**
Fried	0	7	12	0	**19**
Fukunaga	0	2	2	0	**4**
Gioia	0	1	16	1	**18**
Goryanin	0	1	15	0	**16**
Graduate School	0	1	0	0	**1**
Hikami	0	8	21	0	**29**
Ishikawa	0	1	7	0	**8**
Khusnutdinova	0	5	3	0	**8**
Kitano	0	2	12	0	**14**
Kono	0	1	12	0	**13**
Konstantinov	0	7	8	0	**15**
Kuhn	0	3	23	0	**26**
Kusumi	0	3	16	0	**19**
Laurino	0	3	11	0	**14**
Luscombe	0	9	1	0	**10**
Maruyama	0	2	9	0	**11**
Masai	0	5	15	0	**20**
Mikheyev	0	5	15	0	**20**
Miller	0	6	15	0	**21**
Mitarai	0	13	18	0	**31**
Narita (New)	0	3	0	0	**3**

	Books	Book Chapters & Journal Articles	Presentations	Dissertations, Online Databases, etc.	Unit Total
Neiman	0	4	9	0	**13**
Nic Chormaic	0	12	49	0	**61**
Okada	0	3	7	0	**10**
Pauly	0	6	12	0	**18**
Pigolotti	0	4	21	0	**25**
Qi	0	24	3	0	**27**
Research Support	0	18	8	0	**26**
Rokhsar	0	4	6	0	**10**
Satoh	0	46	28	0	**74**
Saze	0	5	8	0	**13**
Shannon	0	8	31	0	**39**
Shen	0	21	45	0	**66**
Shintake	0	5	14	0	**19**
Skoglund	0	7	5	0	**12**
Sowwan	0	4	8	0	**12**
Stephens	0	3	13	0	**16**
STG	0	4	10	0	**14**
Sugawara	0	12	0	0	**12**
Takahashi	0	0	13	0	**13**
Tanaka	0	6	9	0	**15**
Tani	0	7	19	0	**26**
Toriumi (New)	0	0	2	0	**2**
Tripp	0	1	3	0	**4**
Tsvietkova	0	3	27	0	**30**
Uusisaari	0	3	14	0	**17**
Van Vactor	0	0	4	0	**4**
Watanabe	0	4	13	0	**17**
Wickens	0	9	7	0	**16**
Wolf	0	6	5	0	**11**
Yamamoto	0	8	30	0	**38**
Yanagida	0	8	17	0	**25**
Yazaki-Sugiyama	0	3	6	0	**9**
Yokobayashi	0	5	8	0	**13**
Zhang	0	1	12	0	**13**

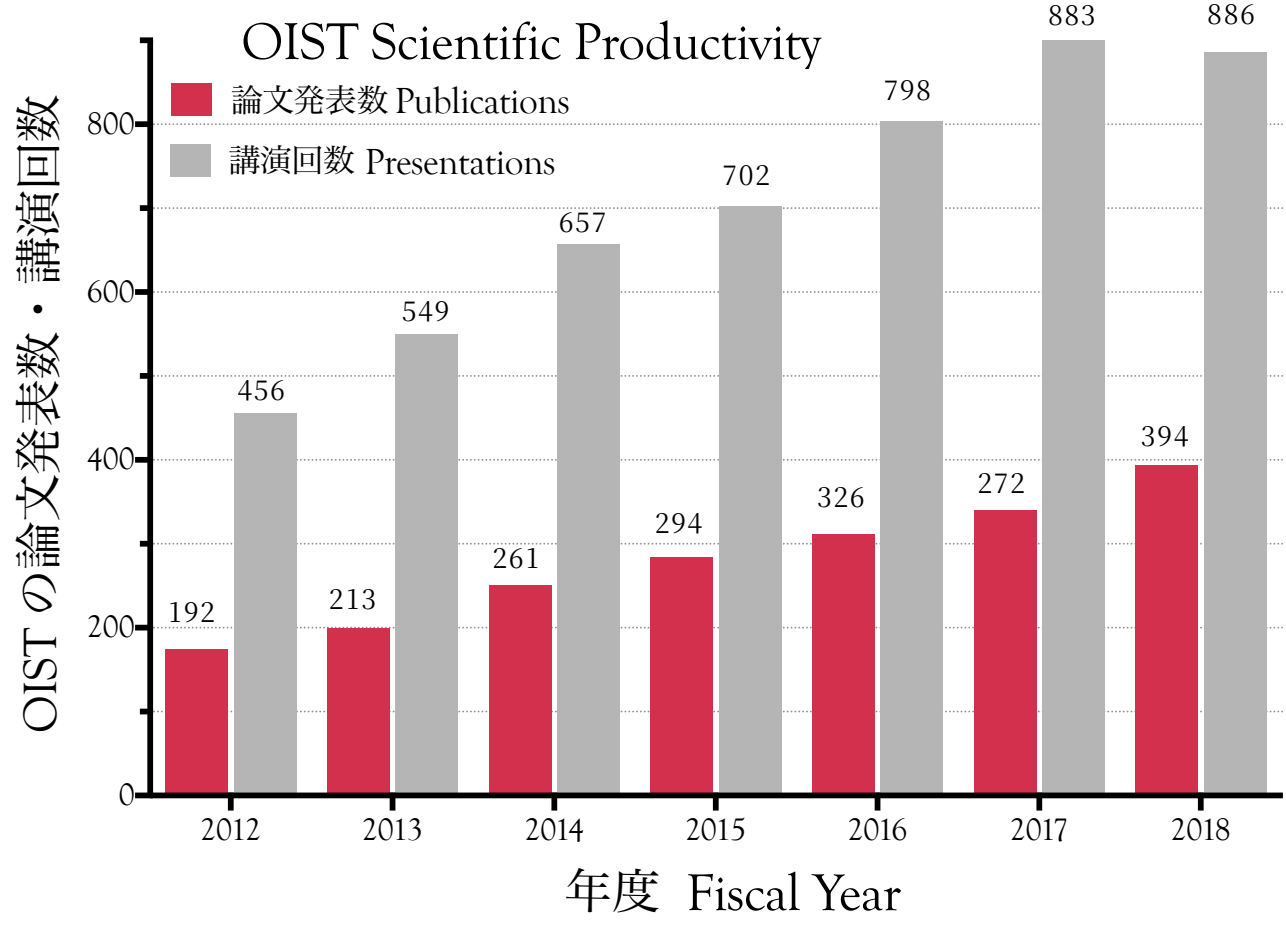
	Books	Book Chapters & Journal Articles	Presentations	Dissertations, Online Databases, etc.	Unit Total
Totals	**0**	**416**	**891**	**3**	**1310**

備考：複数ユニットが共同で出版した論文は、各研究ユニットの論文数としてカウントされるため、全研究ユニットの論文数の合計は、大学全体の論文数よりも多くなります。

OISTの論文数・発表数（平成24～30年度）

OIST Scientific Productivity

Fiscal Year	書籍の執筆及び編集 Books and Edited Books	書籍の章及び学術論文の執筆 Book Chapters and Journal Articles	学会でのプレゼン Conference Presentations	セミナー Seminars	博士論文 Dissertations	発表数 Presentations	論文数 Publications
FY2012	0	192	309	147	0	456	192
FY2013	2	211	430	119	0	549	213
FY2014	0	261	491	166	0	657	261
FY2015	2	292	535	167	1	702	294
FY2016	2	324	616	182	4	798	326
FY2017	2	270	692	191	7	883	272
FY2018	1	393	703	183	3	886	394


OIST Scientific Productivity
論文発表数 Publications
講演回数 Presentations
OIST の論文発表数・講演回数
0
200
400
600
800
192
456
213
549
261
657
294
702
326
798
272
883
394
886
2012
2013
2014
2015
2016
2017
2018
年度 Fiscal Year